

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷六十二第

行發日一月一年三和昭

特別號

法人に關する重複課税の問題 . . . 法學博士 神戸正雄

ハイデッガーの關心論 . . . 文學博士 米田庄太郎

動物界の道德 . . . 理學士 川村多實二

長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出に就いて . . . 文學博士 矢野仁一

型について . . . 法學士 恒藤恭

アダム「富國民論」の研究對象并に方 . . . 法學士 石川興二
スミス「法」の基本的考察

奥羽諸藩に於ける赤子養育仕法 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

自作農地の創設及維持 . . . 法學博士 河田嗣郎

專賣類似の仕法に基く百姓一揆 . . . 經濟學士 黒正巖

アダム・スミス「富國民論」の研究

対象並に方法の基本的考察

石川 興 一一

總て古典なるものは人類的の深きものをその中に含めるものであつて、これに對して働く意識の深さに従つて、斷へず新なるものを與ふるものである。この意味に於て、恰も哲學史上に於けるアリストートル哲學の如くに、アダム・スミスの「富國民論」は經濟學の古典である。

今日のスミス經濟學研究は、リカルドウ、マルクス等のそれを繰り返すことではなく、今日の優れたる學的意識をもつて新なるものをその中に開明することではなくてはならないのである。

云ふまでもなく斯かる研究は容易ならざることであつて、私がこゝに努めんとするは單に其一端の試にすぎないのである。

一 「富國民論」に於ける經濟學研究課題

の形式と内容

スミス「富國民論」を客觀的的基本的に理解せんが爲に先づスミス經濟學成立の基礎的四要因を基本的に明にせんと欲し、前號に於て、先づスミス經濟學の能力因として彼の經濟學の成立する基

礎となつたスミスの諸能力を考察し、次にスミス經濟學の目的因として經濟的對象界に對するスミスの人格的關係を明にしたのであるが、こゝには更に進んで他の基礎的二要因即ちスミス經濟學の質料因たる研究對象と其形相因たる研究方法とを明にしなければならぬのである。¹⁾

今この論に入るに先立つて先づスミス經濟學の目的因とスミス經濟學の研究課題との關係を考へて見ようと思ふ。

前述せしところによつて明にせしが如くスミス經濟學の目的因たる經濟的對象界に對するスミスの人格的關係は「人間の幸福と完成との爲に國民を富ますんとすること」であつたが、此が爲には國民の富を決定する諸事情が支配されなければならない。然し國民の富を決定する諸事情が確實に支配されんが爲には國民の富を決定する諸事情が學的に確實に認識されなければならない。こゝに於て經濟的對象に對するスミスの人格的關係は學的認識の關係に展開しこれを基礎付けることとなるのであり而してこの學的認識をそれに於て成し果げんとするところのもの即彼の「富國民論」が「An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations」（諸國民の富の性質と諸原因の研究）を以てそれが研究課題とした譯である。而してスミスは總て經濟學なるものは同一形式の研究課題を有するものであると考へ「富國民論」中に於て of what is properly called Political Economy, or of the nature and causes of the wealth of nations 云々居る。

1) 本誌昭和二年十二月號第六六一六七頁參照

然らばスミスが彼に先立つ經濟學的體系として従つて同一形式の研究課題を有するものとして考へた重商主義及び重農主義に對して彼の研究課題を内容的に異ならしむるもの何であるかを明にすることはこの點に關して經濟學祖としてのスミスの意義を明にするであらう。

即ち彼は重商主義について「富が金銀に存すると云ふ事と、而してそれ等の金屬は鑛山の無い國へは貿易の均衡により即輸入するよりも大なる價值を輸出することによつてのみ齎らさるゝと云ふ事との二原理が確立された。斯くて國內消費の爲の外國貨物の輸入を出來得る限り減少し而して國內産業の生産物の輸出を出來得る限り増加すると云ふことが必然に經濟學の大目的となつた。」¹⁾と述べ而してこの富を豊にすることを目的としてこの富の原因である外國貿易についての研究が結局重商主義の經濟學的課題であることを示して居る。またスミスは重農主義を重商主義と對立せしめて「諺に棒が一方へ曲げられ過ぎたならば、それを真直ぐにするが爲には同様に他方へ曲げ過ぎねばならぬと云ふが農業をもつて各國の收入及び富の唯一の源泉とする體系を提議した佛蘭西の哲學者達はこの格言を採用した様に見へる。而してコルベールの計畫に於ては都會の産業が田舎の産業に比較して確に高く評價され過ぎた様にこの體系に於ては確に低く評價され過ぎた。」と述べまたこれを論ずる第四篇第九章の題目を「農業體系即土地の生産物を各國の富及收入の唯一又は主たる源として説くところの經濟學の諸體系に就いて。」と名づけて居る。斯くてス

1) Adam Smith; Wealth of Nations, edit. by Cannan I. p. 416.

ミスは重農主義は農業的生産物をもつて富と考へ従つてこの富を豊にすることを目的としてこの富の源泉である農業を主として研究課題とするものであることを示して居る。

即スミスは、此兩者は共に富を豊にせんことを目的とし其富の性質並に原因を研究課題とするものであるが而もその各が富とするところが異つたが故に異なる體系となつたのであると考へたのである。而してスミスは「富國民論」の序に於て「其等異なる計畫——これをもつてスミスは或は都會産業に或は田舎産業に偏頗であつた歐洲諸國の政策を意味す——は、恐らくは、最初は特定の階級の人々の私的利益及偏見によつて、何等社會の全體の社福 (the general welfare of society) に對するそれが結果を考慮し又は先見することなく、採用せられたものであるが、而もそれは經濟學の非常に異なる學説を引き起すに至つた」として兩學派成立の本源につき述べて居るが、此兩學派の計らんとせしところは事實上社會の一部の利益に偏せるものであり従つて其が富とせしどころも未だ眞の「國民の富」ではなく従つてそれ等の學派が研究課題とせし富の原因もまた經濟的社會の一部に偏し未だその全般ではあり得なかつたのである。

然るに彼は社會の全體の社福の立場に立ち「國民の富」の眞の性質を明にしこの國民の富の原因として經濟的社會全般を究明するをもつて眞の經濟學の課題とし彼の經濟學に「諸國民の富の性質並に諸原因の研究」なる題名を附したのである。即其は要するに眞の意味に於ける「國民の富」

の諸原因として經濟社會全體を研究せんとするものであるが、而もこの富の原因が自然的原因を含むものでないことは前號に於て既に明にしたところである。¹⁾

斯くて彼は近世の經濟學の目的を、前號に詳説せしが如く、眞に「國民を富ます」と云ふことによつて確立したと同時にこのことによつてまた經濟學の眞の研究課題を確立し得たのである。

斯くてスミス經濟學の研究課題はスミス經濟學の目的因より規定せられるのであるが此研究課題に於て意味さるゝ研究對象が學的に研究せられ以て此研究課題が解かれん爲には先づ此研究對象が學的に確立せられ更にまたこの研究對象を研究する研究方法が確立されなければならぬのである。而してスミス經濟學成立の基礎的諸要因を明にせんせば既に明にせしスミス經濟學の能力因及目的因の外に更に此二つの基礎的要因も亦明にされねばならぬのである。而して今この二要因を明にするならばスミス經濟學成立の基礎的諸要因の總てが解明されることとなるのである。即ち前號に於て明にせしスミス經濟學の能力因がその目的因に依り働かされ行くことによつて、その對象と方法とが學的に確立せられ更にこの對象がこの方法によつて研究せられるならば、こゝにスミス經濟學の全體は成立することとなるからである。

斯くしてスミス經濟學の研究課題が解決せられスミス經濟學の目的因が十分に充され得んが爲には、この研究の結果が學的に確實なものでなくてはならないのである。而してこの研究の結果

1) 本誌前號第八〇頁參照

が學的に確實なるものならんが爲には此研究對象並研究方法の確立が特に學的なるものでなくてはならぬのである。彼が學問論の理想をギリシヤの古代に求めたことは前號に述べたところであるが、その論理學について述ぶるに當り「異なる著者達が自然哲學並に精神哲學の異なる諸體系を與へた。然しそれ等の人々が其異なる諸體系を支持するが爲に用ひた議論は、常に論證たり得ざるのみならず屢々甚だ貧弱なる誠らしさであり而して時には日常語の不正確と曖昧との外に何等根據のない單なる詭辯であつた。」と述べて居るところのスミスは、彼の經濟學的研究の確實ならんが爲にそれが基礎たる對象並に方法を確立するに當つて十分に學的なることに努めたのである。「富國民論」中に於て特に對象論又は方法論自身がなされざるが爲に且またその敘述が英國風に平明なるが爲に、そこに學的に深き對象論と方法論との含蓄されて居ることを忘れるならば、スミス經濟學を基本的に理解することは出来ない。我々はその平明なる敘述と沈黙との中に彼の經濟學の對象と方法との深き學的なる確立を探らねばならぬのである。

二 スミス經濟學の研究對象並に方法の確立の

基礎を成すスミスの經濟社會本質觀

スミス經濟學の對象と方法を基本的に理解せんには、先づ、スミスの經濟社會本質觀を明に

しなければならぬ。これ此對象と方法との兩者が共にこの本質觀の上に打立てられて居るが故である。

一體經濟社會自體なるものは歴史的社會的實在の中に又は國民的社會の中にそれ自身として發見せられ直ちに以て經濟學の研究對象となし得るものであろうか。常識は屢々經濟的社會なるものをかくの如きものとして考ふるのであるが事實上に於ては經濟的社會生活なるものは諸種の社會生活と一體となつて國民的社會をなして居るものであつて、これをそれ自身として初めより國民的社會の中に見出すことは出來ないのである。於茲經濟學祖たるスミスが經濟學を確立せんが爲には經濟學を成立せしむべき固有の對象たるこの經濟社會自體を學的に確立することが必要であつたのである。而して彼は實にこのことを「富國國民論」中に於て學的に成し果けて居るのである。然らば彼をしてこれを果げ得しめたところのものは何であるか、先づこのことを明にしよ。而してこれが爲には彼の秀れた學的能力の外に更に當時の經濟社會の事情並に學界の事情を考察しなければならぬのである。

先づ當時の經濟社會の事情より考へんに總て或種の生活域 (Lebensgebiet) をそれが對象とする一個獨立の科學が成立し得んが爲にはその生活域が既に相對的獨立 (relativ selbständig) の状態に達して居らねばならぬのであるが、中世の終以來發達し來れる經濟的生活域はスミスの當時に

於ては既に相對的獨立の状態に達してゐたのである。殊に英國に於ては、十八世紀の初にイングランドがスコットランドを合併せしよりスコットランド人の對外經濟上の目ざましき活動によつてその經濟的活動は著しく發展し來つたのであるが、スミスは、このスコットランドの當時勃興しつゝありしグラスゴー市に永く在つて絶へず實業家と交つて親しく經濟社會自體を體驗したのであつた。然しスミスがこの體驗に基いて經濟學固有の對象を學的に確立し得し所以を明にせんが爲には更に當時の學界の事情をも考へねばならぬのである。

即十八世紀の英國に於てはヒューム、ロバートソン、ギボン等の秀れたる歴史家が輩出し歴史の社會的實在がそれを成す諸種の生活域に分解せらるゝことによつて研究さるゝに至つたのであるが、これが可能となるが爲には當時の英國に於て人間本性のより精細な理解に關してなされて居た心的事實の分析的研究 (das zergliedernde Studium der psychischen Tatsachen an feinerem Verstandnis des menschen Wesens.)¹⁾の結果がこれ等の人々によつて歴史的社會的實在の研究に適用せられたと云ふことが重要なことであつた。而してスミスはこの學界にあつて正にこの方法を用ひて彼の經濟學的對象を學的に確立し得たのである。

即スミスは「富國民論」第一篇第一章に於て「よく政治されて居る社會に於て最下層の人々にまで行き渡れる全般の富裕を惹起するものは分業の結果としての總ての種類の生産物の非常なる増

1) Dilthey; gesam. Schrif III S. 246.

大の爲である」と述べて分業的社會全體を一つの事實として考察し然る後第二章に於てこの事實としての分業的社會の成立を可能ならせしむべき本質的原理を求め而してこれを人間性の本質の分析の中に見出して居るのである。

即彼はこの分業的社會を「人間性の内部に於ける一種の傾向性より頗る遅々且緩徐なるが而も必然的なる結果である。」とし而してこの性向は即「物と物とを交換する傾向性」であるとし而もこの傾向性は派生的なるものであつて「それ以上の説明を許さない人間性に本源的なる根本的原理の一種」(One of those original principles in human nature, of which no further account can be given)にはあらざることを暗示して居るのであるが事實更に進んでこの交換性を人間性に本源的なる根本的原理の一種なる經濟性に於て基礎付けて居るのである。即彼は次の如くに述べて居る。

「開化せる社會に於て人は絶へず非常に多くの人々の協力と援助とを要するのである。……然し其援助を單に彼等の慈愛心 (benevolence) のみより得んと期待することは不可能である。若し自己の利益になる様に彼等の自愛心 (self-love) を刺戟し而して自己が彼等より得んと欲するところのものを彼等が自己の爲にしてくれることは即彼等自身の利益であると云ふことを彼等に示すことが出来るならば、單に彼等の慈愛心に訴へるよりも一層よく目的を達し易い。……而し

1) the propensity to truck, barter, and exchange one thing for another. Ibid. I, p. 15.

2) Ibid. p. 15.

て我々が我々の必要とするところの扶助斡旋の大部分を相互に得るのは此仕方にて於てである。我々は日々の食事を屠肉者酒造者パン製造者の慈愛心に待つのではなく彼等自身の利益に對する彼等の顧慮に待つのである。我々は彼等の仁愛 (humanity) に訴へるのでなくして彼等の自愛心 (self-love) に訴へる、而して彼等に決して自分自身の必要を告げずして彼等の利益を告げるのである。」と述べて居る。

斯くてスミスは自己の眼前に展開せる經濟社會についてそれが本質的原理を求めこれを人間性の分析の中に見たのである。即スミスは人間の行爲の動機に *benivolence* (慈愛心) と *self-love* (自愛心) との二種あることを認め而して自愛心をもつて經濟的社會の本質的原理と考へたのであるが、然しこの自愛心なるものは單に自愛心ではなくしてこの自愛心の一種である而してそれが如何なるものであるかは左に擧ぐるスミスの語より最明白となると思ふ。

即スミスは他の場所に於てこれを明に *the natural effort which every man is continually making to better his own condition* (總ての人が自己の境遇をより良くせんが爲に絶えずなし居る人間の本性的な努力) と呼んで居るが更に *the desire of bettering our condition, a desire which, though generally calm and dispassionate, comes with us from the womb, and never leaves us till we go into the grave,* (吾人の境遇を改善せんとする欲求、それは一般に平靜であり沈着なるものではあ

1) Ibid. II. p. 172.

2) Ibid. I. p. 323.

るが、而も胎内より我等と共に來り而して死に至るまで我等より決して離ることなき欲求である。更に The uniform, constant, and uninterrupted effort of every man to better his condition, the principle from which public and national, as well as private opulence is originally derived (人が自己の境遇を改善せんとする一様、不變、且不斷なる努力、それは公の、國民の、並に個人の富裕がそれより本源的に生じ來る根本原理である。)と述べて居る。

斯くて彼が經濟社會の本質的原理とせし self-love 自愛心なるものは人間性の固有なる本質の一種であり一切の富即經濟的價値の根源となるところのものであるが故に、それは即人間性の本質の一たる經濟性なのである。而してヌミスが交換性と云へるは人々がこの根本性をより良く實現せんが爲に交換の關係によつて自己の經濟的價値を實現することによつて同時に他人の經濟的價値を充さんとする傾向性であつて即以下に述べるが如く此經濟性が社會的關係を自覺し包含することにより成るものと解せらるべきものである。而してこの經濟性に基く交換性によつて自他の經濟價値行爲が相互に結んで成立つて居る社會が即經濟社會であることヌミスは考へたのである。

かくてヌミスは人間性の本質の分析の中に經濟性なるものを發見しこれを原理とすることによつて經濟社會自體を他種の社會現象より分離せしめ以てこれを經濟學固有の對象として經濟學成立の基礎を置いたのである。

ミスはかく事實としての經濟社會につきそれが本質的原理を人間性の本質の一としての經濟性に於て發見したる後此本質的原理自體より經濟社會なるものが成立すべき所以を論證すべく次の如くに述べてゐる。「例へば狩獵者又は牧畜者の種族中に於て或人は他の人々よりも秀れたる速さと器用さをもつて弓矢を作るならば、彼はそれを屢々彼の仲間と家畜又は獸肉と交換し、而して彼は遂にかゝる仕方によつて自から野に出でて野獸を捕ふるよりも、よく多くの家畜及獸肉を得ることを發見する。それ故に彼自身の利益に對する考慮より弓矢を作ることが彼の主なる仕事と成り、彼は一種の武器製造人となるに至る。」而して同様にして他の人々も彼の利益に對する考慮よりして或は大工に或は鍛冶屋に或は衣類職人になると云ふことを述べて居る。

即ミスは分業的社會なるものは人々が自己の經濟的利益に對する考慮より其社會の全體の狀態に適合せしめて自己を一定の職業に定め、以て自己の勞働の生産物を他人のそれと交換することにより即經濟性が社會的關係を自覺し包含せし交換性により成るものと考へるのである。

更に進んで第三章に於て分業的社會關係の發展の要件としての市場の範圍を論じ而して市場の範圍の廣まるに従つて分業的社會關係が廣まり行くことを明にし、斯くして分業自體の論を終へたる後次章即第四章の冒頭に於て「分業が一度行き渡つて確立されたる時には、人が自分の勞働の生産物によつて充し得る慾望は極めて僅である。人は自己の勞働の生産物にして自己の消費を

超過する餘剰の部分を自己の必要とする他人の勞働の生産物の部分と交換することによつて自己の欲望の大部分を充すのである。斯くして總ての人は交換によつて生活する換言すれば或程度に於て商人となる而して社會自身は商業的社會と呼ばるゝことが適當であるところのものとなるのである。」と述べて居る。即此商業的社會なるものが彼の經濟學の基本的對象となるところの經濟社會自體なのであつて、此第四章以後の研究は斯く其本質が闡明されたるどころのものを對象としてなされて居るのであるが故に彼は其經濟學の基本的對象を於茲確立した譯である。

以上述べ來れるスミスの對象確立の方法に於て「富國民論」を一貫する根本的方法たる孤別化的理想化的止揚的方法 (Isolierend-idealisierend-aufhebende Methode) と云はるべきものが既に見らるゝことは注意すべきことである。即それは先づ具體的全體よりそれが要素を抽出し、これを目的的に理想化する¹⁾ ことによつて闡明し、然る後これを一段高き状態に止揚してこの段階を明にし、更にこの段階をより高き段階に止揚し、斯くて次第に元の全體に還り行くことによつてこの全體を闡明する方法であるが。即第一章に於ては全體としての經濟社會に就て考察したるスミスは、次に第二章に於てはこれを次第に分析して先づ人間の交換性に至り更にこれを分析して人間の根本原理の一としての經濟性にまで至つてこれをそれ自體として闡明し、然る後次第にこれを

綜合して先づ交換的關係にもたらし斯くて分業的社會關係を成立せしめ、進んで第三章に於てこ

1) 此理想化的方法の根據は第一三七頁に述るところの精神的¹⁾作用連關の内面的目的性にある。

の關係を發展せしめることにより遂に第四章の初めに於て第一章に問題とせし全體としての經濟社會の立場に還り來つたのである。この方法が富國民論全體に及す意義は次第にこれを明にするこゝにする。

こゝに注意さるべきことは、スミスが經濟社會の本質的原理を求むる問題を “Of the principle which gives occasion to the division of labour.” 「分業を惹起する原理に就て」として經濟社會發生の問題の形に於て提出し而もその中に於て本質的原理を明にしてゐることである。このことも當時の學界の事情より理解し得べきことであつて、例へばヒュームは認識の本質的原理の問題を認識の發生の問題として提出したのであるが、それはカントの批判哲學に至つて初めて明確に本質的原理の問題として提出されたのである。この批判哲學を通過せし今日の精神科學に於てはスミスが發生の問題の形として提出せしものを明確に本質的原理の問題として提出し而して諸種の生活域を可能ならしむべき本質的原理の何なるやを明にせんとするのである。而も今日の精神科學的認識論が人間性の諸種の本質を分析反省して而してその中に經濟的其他の精神法則性を認めこれを本質的原理とすることによつて、諸種の生活域を學的に把握せんとするその方法は原理上に於て既にスミス等によりなされて居るのである。否斯くの如き方法は現代の精神科學的認識論がスミス等古典經濟學者より學ぶこと多きところのものなのである。而してこの方法が文化現象

の研究全體に對して有する重要な意義は今日の精神科學的認識論が詳にしてゐるところである。

スミスはかく人間性の本質の中に經濟性なるものを明確に把握することにより經濟學固有の對象を確立したのであるが、また彼は富國民論全體に亘つてこの人間の經濟性をもつて總ての經濟現象の考察の基礎としてゐるのである。これ經濟社會なるものが經濟性をもつてそれが成立の本質的原理として居る以上、また當然のことである。かくてスミスが人間の經濟性を明確に把握したことは經濟學が一個の學として確立する上にとつてもまたその研究方法の進歩の上にとつても經濟學祖としてのスミスによつて成されたる重要な貢獻である。

以上に於てスミスが經濟社會なるものを確立するに至つた方法を考察したのであるが次にこの考察を基礎として經濟社會なるもの、本質を明にしなければならぬ。而して今これをディルタイの「一つの文化的業績を實現する最單純なる最同質的なる作用連關」¹⁾としての文化體系 (Kultur-system) と比較することによつてその本質がこのものに相當することを明にしよう。

即ディルタイが文化體系の性質として擧げるところとスミスの經濟社會の性質とを左に簡單に比較して見んに、

先づ一つの文化體系に於ては一種の文化價値の實現がなされるものであるがスミスの經濟社會

1) Dilthey; gesam. Schrif VII S. 166 以下

に於ては經濟價値の實現がなされるのである。

次に一つの文化體系に個我は全體として結ばれて居るものでなく、個我は諸種の作用連關 (Wirkungszusammenhang) に織り込まれて居るものであつて一つの文化體系にはこれに屬すべき特定の出來事のみによつて結ばれて居るものであるが、既に明にせし如くスミスも經濟社會の本質的原理たる人間の經濟性を以て具體的なる人間性の一面となしたのであつてその結果人間の經濟性によつて成立して居る經濟社會なるものは具體的なる社會生活の一面たるにすぎないのであり經濟學はこの一面の對象を研究する一社會科學となるのである。故にスミスは人間の經濟性を原理として經濟學たる「富國民論」を成せしと共にまた人間の慈悲心 (Benevolence) を原理として道德情操論を成したのである。もしこれに反して屢々經濟學者に於て見らるゝが如く經濟性を以て人間性の主たる本質と考へるならば經濟現象が社會生活の主たるものとなり經濟學が社會學の本質的なるものとなるのであるがこれはスミスのならざるところであると共に今日の精神科學論の許さざるところである。

次に分化體系の作用連關は各成員の分化されたる地位によつて實現せらるるものであるが、スミスの分業的なる經濟社會は正にかゝるものであることは云ふまでもなからう。

次に文化體系に於ては「其價値實現の仕事に向けられて居る總ての者の爲に共同的價値 (ethic

Gemeinsamer Wert) が實現せられ、而して各個人が要求し而も個人としては決して實現し能はな
いものが全體の仕事に於て各個人に與へられる。而して其全體の仕事は各個人がそれに關與する
ことの出來る共同的に創造されたる包括的な價值である。」がスミスの經濟社會に於ては「國民の
富」と云ふ共同的なる經濟價值がその實現に共力する總ての成員の爲に實現せられるのであ
る。而して斯くの如くして成員に分ち與へられる富が到底個人としては實現し得べくもない豊富
なるものであることはスミス自身分業的社會の利益として第一章全體に渡つて力説するところであ
る。

次に斯くて文化體系に於ては部分たる成員は全體の價值及目的の實現の爲に他の部分と共に働
くことによつて全體に對して價值の支持者としての意義を有するに至るのであるが、スミスの分
業的經濟社會に於ても正に同様である。

次に各種の文化體系はそれに固有の構造 (eine ihm eigene Struktur) を有して居るのであるが、
スミスの經濟社會もまた經濟的文化體系としての固有の構造を有するところのものでありスミス
が經濟學の基礎として「富國民論」第一及第二篇に於て究明してゐるところのものは即この經濟的
文化體系の固有の構造である。

次に各種の文化體系はそれに固有なる發展の段階を示すものであるがスミスは經濟社會につい

て交換並に生産の觀點よりかゝる段階を明にして居るのである。

即ち以上デイルタイが文化體系の性質として述べて居るところは總てこれをスミスの經濟社會について見ることが出来るのである故にスミスの經濟社會の本質は正に今日の精神科學論に於て所謂文科體系である云ふことが出来るのである。

デイルタイは文化體系をもその中に包含するところの總て精神的作用連關の一般の本質として「理解を基礎とする作用連關の中に於て價值を生産し目的を實現することが正に精神の構造であり、これが精神的作用連關の内在的目的的本性(der immanent-teleologische Charakter der geistigen Wirkungszusammenhänge) と呼ばるべきものである」と云ふことを述べて居るが、スミスの經濟社會に於てもその成員はその作用連關の中に於て無自覺に行動して居るものではなくその全體の狀態を意識しこれに自己の經濟的行動を適合せしめることによつてその作用連關の中に於て各自の經濟的價值を實現して居るのであり、斯くてまた全體としての價值がそこに實現されて居るのであることは既にこれを明にされたところである。こゝにスミスの經濟社會の本質を精神體として物理體的性質及生物體的性質より區別すべき重要な點があるのであり、従つてまたスミスの立場を單なる個人主義又は單なる全體主義より區別すべき重要な點があるのである。

スミスの經濟社會をもつて單なる個人の集合に過ぎないと考へる個人主義的見地の誤なること

1) Dilthey; gesam. Schrif. VII S. 153. こゝに精神的なるもの、理想化的研究方法の根據があるのである。

は更に次のことよりも明かなるであらう。

即彼は「異なる人々の間に於ける先天的才能の相違は實際に於ては我々が意識せるよりは遙に少きものである。人々が成人した時異なる職業の人々を區別する様に見える才能の非常なる差異は多くの場合に於て分業の原因ではなくして結果である。」¹⁾と述べまた分業社會は社會大多數の貧者の精神を不具ならしむるものであることをも述べて居る。²⁾而して分業的社會はかく人々の才能を相違せしむると同時に其相違を有用ならしむるものであることを述べて居るのであるか、³⁾これ經濟社會の各員が社會的全體との關係に於て自己を特定の業に定めこれを日々の業としてこの社會的全體の中にあつて自己の經濟價值を追求し行き従つて各人の性格は自からこの社會的全體より決定せらるゝことゝなるが故である。即彼は社會的全體と其部分としての個我との間に相互作用を認めたものである。

而もスミスの立場はこの個人と社會との關係を恰も生物體に於ける部分が單に全體の一部としてこれに隷屬してゐるが如くに考ふる反個人主義としての單なる全體主義の立場ではなくして、既に明にせしが如く部分としての各人は社會的全體の中にあつて全體の状態を意識しこれに自己を適合せしむることによつて自由に自己の經濟的價值を實現し而もそのことによつて同時に社會全體の富即「國民の富」を實現し行くものであると考へたのである。

1) Wealth of Nations I. pp. 17-8.

2) Ibid. II. 267-9

3) Ibid. I. 18.

三 スミス經濟學の研究對象

スミスが人間の幸福と完成の爲に、「國民の富」を豊にすることを以て彼の經濟學の目的となし而して經濟社會自體を此國民の富の基本的原因としてその基本的研究對象としたことは既に明にしたところである。斯くて富國民論第一第二兩篇はこれが研究に當てられたのである。

乍然事實上國民の富を決定しつゝあるところのものは經濟社會の單にそれ自體としての働ではなくこれに國家的活動の附加されたところのものである。而してスミスはこの國家の經濟社會に對する活動について、國民の富の爲に有害なるもの即その消極的原因となるものと、必要なるもの即積極的原因となるものとを認めたのである。

而してこの消極的原因たる國家の不合理の行動即干渉を主として第三及第四篇に而して積極的原因たる國家の合理的行動即統制を第五篇に於て論じ以て「富國民論」を終へてゐるのである。かくてまた「富國民論」は其書の題名の示めすが如く總て「國民の富の原因の研究」であると云ふことが出来るのである。

スミスがかく確然とその對象を確立し得た所以は經濟社會自體の文化體系としての本質を把握して居たからである。即經濟的文化體系は諸種の文化體系と共に國家的全體に統一され國民的社

會を成してゐるものであるが、スミスはこの經濟的文化體系を抽出確立して先づこれを研究し、然る後この上に國家の行動を附加し更に他種の文化域との關係に於て考察し以て複雑なる對象全體を學的に把握してゐる。即ち、にも前述せし孤別化的理想化的止揚的方法を見るのである。

スミスはこの經濟的社會自體を對象とする研究に當つて當事者の平等なる關係のみならず不平等關係をも研究對象として居るのである。價值論に於ける獨占價格論、強者たる雇主と弱者たる勞働者との對立による勞賃決定論、干渉の結果としての勞賃間の不平等關係即これである。

スミスとマルクスとが共に不平等關係を研究對象としながら其重要視の度合の異なる所以は有産者と無産者とを決定的に分割するに至りし産業革命の前の經濟社會をスミスは體驗し、マルクスは産業革命後この階級分裂が高調に達せし經濟社會を體驗せしことのみよりも既に理解し得らるべきことなのであるが、更に兩者の個性並に國民性の問題をも併せ考へらるべきであらう。

次にスミスの經濟社會自體の研究の中に於ては後にゼー・エス・ミルに至つて Dynamics として研究さるゝに至りしどころの研究もその中に含まれて居ることが注意されなければならない。即ちスミスは第一篇第八章以下に於て勞賃利潤等の決定を論ずるに當りそれが社會の進歩しつゝある、停滯せる又は退歩しつゝある状態によつて、如何に影響さるゝかを問題として居るのである。

スミスは「國民の富」の消極的原因として當時一般に行はれつゝあつたところの中世的遺物として又は中世的精神に基ける國家の經濟社會に對する不合理なる統制即干涉を頗る重大視したるが故にこの國家的干涉自體を次に彼の經濟學の重要なる研究對象となしその第三篇（中世以來の干涉の歴史）第四篇並に第五篇第一章第三部第一節第二（對外經濟に對する國家の干涉）をこれに研究に當てゝゐるのである。

かくて「國民の富」に對して經濟社會自體の働の有力なること及これに加へらるゝ國家の干涉の有害無益なることを明にしたる後、而も經濟社會自體は國家の合理的なる統制を待つて初めて十分に「國民の富」を現實し得べきものなりと考へし彼は、第五編に於て此國家の合理的統制並にこの合理的統制に伴ふ國家自體の經濟をその研究對象として居る。

この國家經濟自體が「國民の富」の諸原因として彼の經濟學の研究對象となる所以は經濟生活に對する國家の合理的統制の爲には、國家が必然に自己の經濟を營まねばならぬと云ふ爲のみではない。總ての國家的活動には必然に費用を要しこれを處理する國家經濟なるものは國民の全收入の一部を國家が徵發しこれを國民の爲に支出するのである。故にその收入は國民の全收入の一部を徵發するのであるからその方法にして當を得なければ「國民の富」を大いに害することゝなるのである。またその支出は其本質上國民の生活の爲に用ひられ結局國民の生活の爲の必要費又は使

宜費となるべきものであり即「國民の富」の一部を形成すべきものである、故に其支出が正しき程國民の富を豊にすることゝなりまたこの支出が不當である程「國民の富」を減少することゝなるのである。

こゝに注意すべきことは國家經濟に於ける支出は國家の活動全體によつて定まるのであるが故にスミスは第五編の中に於て單に國民的經濟生活に對する國家の合理的統制のみならず國家が國民的生活の諸種のもの即軍事、司法、學校教育、宗教々育等に對してなすべき合理的統制を研究對象として更に此等のものと經濟との關係をも研究してゐることである。

次にスミスをしてかく諸種なる事態をその研究對象たらしめたる基礎となつた體驗について考へて見たいと思ふ。これ總て或事態を自己の學的研究の對象となし得んが爲にはその人はこれに關して纏つた體驗を有せねばならぬからである。

經濟社會自體についてのスミスの體驗については以上に於て述べたところによつて明であらう。只だこゝに附言したきことはこの經濟社會自體が、獨逸學派に於けるとは異なつて、今日に至るまで英國正統學派の中心的なる研究對象となれることである。これ國家の統制の強く支配せざる自律的なる經濟社會は自律的なる英國國民の經濟社會に於て最もよく實現されて居り從て英國國民の最もよく體驗せるところのものでありまた英國國民の理想とするところもまたこの自平的なる

經濟社會が主となるが故であらう。

スミスは前述せしが如く經濟社會自體を研究對象とせし後これに對する國家の不合理の統制即國家の經濟的干涉を以てその研究對象として居るのであるが、中世的制度の遺物としてのまたは中世的精神に立てるところの國家の經濟的干涉は當時は尙廣く行はれつゝあつたところにして、スミスはそれが「國民の富」に對する有害無益なることを體驗し得たのみならず當時盛なりし歴史的研究とスミスの歴史的研究態度とはスミスをして遠くローマ没落以來のその發生發達とその經濟的意義を體驗せしめたのである。

次にスミスは前述せし如く正しき國家的統制及國家經濟自體をもつてその研究對象としたのであるが、當時の英國に於てはスミス自身度々「富國民論」中に云へるが如く他の何れの歐洲諸國に於けるよりもより正しき國家統制が行はれて居りしが故にスミスは當時の英國に於て國家干涉の妨げはらにこの正しき國家統制を或程度まで自ら體驗し得たのであるがまた當時盛であつた歴史的研究と彼の歴史的研究の態度とはスミスをして正しき國家的統制一般をギリシャ、ローマの古代社會につき歴史的に體驗せしめたのである。スミスが富國民論中に於て屢々國家統制の理想を古代の社會に見て居ることは注意すべきことである。

以上述べ來りしところにより明なるが如く富國民論の研究對象は經濟學的研究對象の殆ど全體

を蓋ふて居るのであるがこれスミスが經濟學の目的を社會全體の立場に於て確立しこの目的爲に必要な一切の問題を考察せんとせし事と、且當時の英國經濟社會自體が極めて多面的であり而して英國及其他の國の經濟社會に關する豊富なる體驗を彼が有せし事と、更に彼の學問的自覺の深きとによるのである。スミスが彼以後に來るべき諸經濟學に對して全體的地位に立つてゐる所以はこの研究對象上の事情に於て見られるのである。

四 「富國民論」の研究方法

扱て以上述べ來れる研究對象をスミスが研究するに用ひたる方法の骨子をなすべきものは理論的、歴史的、實踐的と呼ぶべき三種の研究方法であつてその研究對象の本質に正に即して立てられて居るところのものである。こゝには此三種のものみに就て考察して見よう。

先づその理論的方法より見んに、スミスはこの研究方法をもつて「富國民論」第一篇第二篇に於て經濟社會自體のそれ自身としての構造を明にせんとして居るのである。而してこの理論的研究をなすにも前述せし孤別化的理想化的止揚的方法を一貫して用ひてゐるのであるが、然しこゝには理論的方法に特有なるものを主として明にしなければならぬ。

スミスの理論的方法は研究對象の基本たる經濟社會自體の本質の上に於て打ち立てられて居る

ものである。卽曩に明にせし如く、スミスに於ては、經濟的社會なるものは *The uniform, constant, and uninterrupted effort of every man to better his condition* (各人が自己の境遇を改善せんとする一様、不變、不斷の努力) を根本原理として成れるところの經濟社會自體を本體として考へられてゐるものである。卽經濟社會に於ては各人が自己の經濟的價值即富を實現せんことを目的として一様不變不斷の努力をなして居るのであつて、この各人の内在的目的性を基礎として成立つ經濟社會の法則性を把握せんとするが卽スミスの理論的研究方法である。

而してスミスはこれが爲に二種の考察の方法を用ひてゐる。その第一は卽 *“Perfect Liberty”* の假定の下に於ける *Isolierend-idealisierende Methode* (孤別化理想化的方法)であつて、第二は大量的考察の方法である。今前者より見んに、スミスはこの *“Perfect Liberty”* なる假定を明示せざる場合にもその理論的研究の全體に渡つてこの方法を用ひてゐるのである。然しそれはこの假定の下に於て最も顯著に現はされてゐるのであつて、今其一例を擧げんに彼は勞賃並に利潤の決定について次の如くに述べて居る。

“This at least would be the case in a society where things were left to follow their natural cause, where there was perfect liberty, and where every man was perfectly free both to chuse what occupation he thought proper, and to change it as often as he thought proper. Every man's interest

would prompt him to seek the advantages and to shun the disadvantageous employment.”¹⁾

即ち完全なる自由の存する社會とは各人の經濟行爲を其本質たる内面的目的性に從ひ完全化した社會であつて、それは人間の經濟性より成れる社會的關係を抽出し理想化し純經濟社會として考察する爲の研究方法上の假定であり、かくて所謂 *Idealtypus* (理想型) なるものが闡明されるのである。²⁾ 而してこの文章に於て *were, was* 等の假定的の云ひ現しが用ひられてゐることは、この状態が決して現實の事實状態でなく單に理論を究明する爲の思惟方法としての假定であることをスミスが十分自覺して居てこれを明示するものであつて、特に注意することを要することなのである。次にこゝに彼が理論的研究に於て屢々用てゐる *natural* なる語の意義が明に示されてゐる。即それは完全なる自由状態に於て經濟的因素のみが理想化されたる場合に起るべき筈のものを意味するのであつて即經濟社會自体に本質的内在的なるものを示すものである、從てそれは常に事實上 (*actual*) のものと注意深く區別されて居るのである。例へば價格論に於ても *natural price* は實現すべき筈の價格であつて現實に現らざる、價格は市場價格である。

スミスが經濟社會の法則性を把握する爲に用ひたる大量的考察とも云はるべき方法はスミス自身の次の語より明にされるであらう「蓋し普通一般の慎重の原則は常に必ずしも各個人一切の行動を支配するものに非らずと雖も、各階級又は各種類に於ける多數人士の行爲は此原則に動かさ

- 1) *Ibid.* I p. 101. このイタリックは筆者の附せしところ。其他 p. 58. p. 64. p. 116 等参照。
- 2) 精神的作用連關と其理想化的研究方法との關係に就ては第一三二頁及第一三七頁参照。

るゝものなればなり」と述べて個々人については必ずしも求め得ざる法則性が社會現象としての大量的考察の上には求め得べきことを示して居るのである。同様の考察方法はこれを明示するに否とにかゝはらずスミスが理論的研究全體に渡つて用ゐて居るところである。前述せし方法は具體的なる社會より孤別化的理想化的方法に依て純經濟的なる關係を抽出しこれに就いて理想型を求めるのであるが、この方法は具體的なる經濟社會を大量的に考察してそこに法則性を求むる方法である。而して前の方法は所謂抽象學派に至り徹底的に用ひられ遂にスミスに於て意識されて居たそれが具體的事實に對する關係も忘れられるに至つたところのものである。

以上はスミスの理論的研究についてあるがこれに結んで經濟史的研究に於けるスミスの研究方法が考察されねばならぬ。

富國民論中に於て經濟史的研究が主となつて居る部分は第三篇と第一篇の終なる第十一章の附論 (Digression) とであるが、こゝに於てはスミスは既に闡明せられたる理論をもつて事實を研究して居るのである。即スミスは第一篇の終章に於ける研究に當つて第一篇に於て既に闡明されてゐる理論を用ふることによつてそこに於て論明さるべき諸事實を解明して居るのである。また第三篇に於てローマ帝國没落以後の經濟的事實の變遷を考察するに當つては既に第一第二兩篇に於て明にされたる理論的研究の結果を用ゐてゐるのみならず、更に先づ第三編第一章に於て前篇の

末章に於て既に明にされた資本の用途の自然的順序の理論を經濟的社會事情の發展に關する自然的順序として展開し、此を第二章以下の事實的研究の土臺として用ゐて居るのである。而してそれは正に今日の精神科學論又は文化科學論に於て *Entwicklungstypus* (發展的典型) と呼ばれるところのものである。即ちスミスはこの發展的典型を求むるに當つても第一第二兩篇に於て理論を考察した時と同様の精神に於て理想化的方法を用ひ而してその結果明にされしこの社會事情變遷の順序と同じく *natural* なるものとし *the natural order of things* と呼び而もそれが事實上の變遷の順序と異なるべきことを認め、事實上の變遷をこのものを基準とすることによつて明確に把握せんとして居るのである。¹⁾

以上に於て明なるが如くスミスは理論的研究と歴史的研究との關係を適切に把握して居たのである。即彼は精神現象又は文化現象の事實は理論的研究としての知識を用ふることによつて初めて學的に理解 (*verstehen*) されるべきものなる事を知つて居たのであつて彼の後に來る所謂抽象學派に於けるが如く理論をもつて事實と誤ることもなく、また歴史派等の如く事實を事實とのみして事實に於ける理論性を看過するものでもなかつたのである。而してこれ正にその研究對象の本質に即したる正しき方法である。

斯く理論と事實との關係を適切に把握したるスミスはまた理論を究めるに當つてそれに關する

1) *Ibid.* II. p. 356.

事實を反省することにつとめて居るのである。主として理論的研究である第一篇第二篇が抽象的の無味に陥らざるは彼が理論を明にすると共にそれに適切なる事實を指示することをつとむるが故である。

スミスは斯く理論的研究と歴史的研究とをなせし後更に第四第五兩篇に於て實踐的研究をなして居る。理論的並に歴史的研究とは對象の存在の研究であるが、前述せしが如く經濟社會なるもの、本質は内面的目的性を有せるものであつて價值を實現し行く發展的生命であるが故にそれは更に實踐的研究の對象となるべきものである。而して實踐的研究はこの存在の研究を土臺としてなさるべき規範的研究であるが故に、スミスがこれを前二種の研究方法の後に於てなせることは正しいのである。かく實踐的研究は存在の研究を土臺とするものであるが故に第四第五兩篇の中には歴史的及理論的研究も含まれてゐるのであるが而もスミスはこゝに於て實踐的研究方法を主たる研究方法として用ひて居るのである。即彼が「富國民論」全體の窮局の目的として打立てたところの「國民を富ます」と云ふことを價值標準として先づ國家的干涉の下にある當時の經濟社會を價值批判し、斯くて此價值標準に適すべき理想的なる經濟社會の状態を明にし、更にこの理想的なる状態へ現實の經濟社會を導くべき方策を究明して居るのである。

即國民を富ますことを目的としこれが爲に必要なる認識をなさんとせし彼の「富國民論」全體の

1) スミスは存在の研究を主としたる中に於ても時に價值批判をなして居るが眞に實踐的研究を用いてゐるは富國民論の此部分に於てである。

研究はこゝに至つて最後の段階に到達したのであつて、こゝに於て求められたる智識はこれを「富國民論」の對象とせし現實社會に實現することによつて「富國民論」の窮局の目的たる「國民を富ます」ことを結果すべきところのものなのである。

スミスが第四及第五兩篇に對し特に序を設け國家の立場に於ける經濟政策の目的を明示せしことは、この兩篇の有するかくの如き意義を明示するものである。

斯くてスミス富國民論全體に於て理論的研究は歴史的研究の土臺となりまた兩者は共にこの最後の實踐的研究の土臺となりこれ等のものは相結んで一體としての「富國民論」全體の研究方法を構成してその研究目的を達せしめて居るのである。

斯くしてまたこの三者の間にも「富國民論」全體を貫く孤別化的理想化的止揚的關係が見られ得るのである。

スミスに於ては經濟學の研究に用ひらるべき三種の研究方法の總てが斯く適切に用ひられて居るのであつて、スミスは經濟學の目的及對象についてのみならずその研究方法についても經濟學祖たるに價するのである。

而して彼が研究方法についてかく至當なるを得し所以は、彼がその對象たる經濟社會の本質に關し學的自覺の深かつた事にもよるとは云へ又彼の性格に於て物の本質を知らんとする理論性、

と事實を重する事實性と更に理想を實現せんとする理想性とが調和ある發展をなして居た事にもよるものであらう。この理想性は彼の人道的精神が事實を重す精神と結ばるゝことにより出で來るものであつて、「富國民論」の全體を貫くところのものである。

以上に於て私はスミス經濟學成立の基礎的四要因を、即前號に於てはその能力因と目的因とについて本號に於ては認識對象と方法とについて、基本的に考察し且これ等のものに關するスミスの經濟學祖としての重要な意義を明にしたのである。

かくて基本的に解明されたる基礎的四要因よりスミス經濟學の全體が考察された時こゝに初めてその全體が統一的基本的に理解せらるゝこととなるのであるがこのことは後日改めて試みることにし、今はスミス研究の現代經濟學に對する關係を一言してこの論を結びたいと思ふ。

スミスが當時尙形而上學へ隸屬してゐた精神科學を自律せしめんと欲し、而してそれが一部門として經濟學を打立てたことは既に明にしたところであるが、今日經濟學をもその中に包含する精神科學全般の中心問題もまた同じく精神科學の自律である。即それはスミス以後に於てこの中世の形而上學に劣らざる力強さを以て臨み來り精神科學をこれに隸屬せしめたる自然科學の支配より精神科學を再び自律せしむることである、而もまた、スミスがそれが自律の爲にその範をキ

リシヤに求めしが如く、ディルタイ等により代表さるる現代の精神科學論もこの自律の爲にヘーゲルに結び更にヘーゲルがその精神哲學の神髓をこれに得しアリストートルに結びてこれを新しく展開せしめんとして居るのである。

斯くて精神科學が其自律を求むる時その還り行く源泉は常にギリシヤであつたのであるが、現代精神科學の努力とスミス經濟學の努力とはこゝに内面的に相結ばれて居るのである。

かくて現代の精神科學的意識をもつてスミスを研究することは、これを深く理解し得る所以であると共にまた現代經濟學界の使命たるべき「精神科學としての經濟學の自律」の爲には一度深くスミスに還らなければならないのである。(丁)